

(一社) 東洋音楽学会 西日本支部だより

News Letter of the West Japan Chapter, Society for Research in Asiatic Music

第 104 号 2025 年(令和 7 年) 6 月 5 日発行

すでにお知らせしておりますように、「西日本支部だより」は、第 98 号から電子媒体のみでの刊行となっております。必要に応じて印刷してご覧ください。次回の例会案内については、東洋音楽学会ウェブサイトの西日本支部のページをご覧ください。

目次

1 定例研究会の記録	1-2 頁
2 次回定例研究会案内	3-6 頁
3 お知らせ	6 頁

1 第 301 回定例研究会の記録

関西支部第 301 回定例研究会は、2025 年 3 月 2 日に大阪大学中之島芸術センターにて行われたシンポジウム「仮設の人形芝居—交叉する娯楽と民俗」として行われた。このシンポジウムは、同センターで開催されていた展示「小屋掛けの人形芝居 日本とアジア」の関連イベントとして位置づけられるものであった。概要・登壇者は以下の通り。

2025 年 3 月 2 日(日) 14:00-17:00 大阪大学中之島芸術センター 3 階スタジオにて
登壇者：瀧見英明(人形劇の図書館)、山下一夫(慶応義塾大学)、藺田郁(大阪大学)、福岡まどか(大阪大学)

開催に先立って、大阪大学の藺田郁氏より趣旨説明が行われた。仮設・野外で上演される人形芝居はどのようなものであるのか？また変容する社会の中で人形芝居はどのような状況にあるのか？という点を日本とアジアの事例から考えることが、このシンポジウムの目的として示された。それに引き続き藺田氏より日本の人形芝居についての歴史、地域分布、現状などが写真や映像とともに発表された。人形芝居にはハサミ式、片手遣い、棒遣いなどのタイプがあることが示された後、東北の片手遣い人形(活動人形あるいは猿倉人形として知られる)と高知の棒遣い人形(土佐のデコ芝居あるいは西畑人形として知られる)について

の概要が述べられた。明治期に広まったこれらの人形芝居は全国的な範囲で興行活動を展開し大衆の娯楽として広く親しまれた。大規模な寺社の祭礼などで上演されたこれらの人形芝居は、多様な趣向と演出によって舞踊や演劇などのさまざまな芸能と共に楽しまれてきたが、メディアの影響などにより衰退の途をたどり、現在では無形民俗文化財としての価値が付与され伝承が続けられている状況にあることなどが報告された。

続いて大阪大学の福岡まどかよりインドネシア・ジャワ島西部の人形芝居の概要が提示された。その成立の歴史や特徴、音楽、仮設舞台の状況、上演を行う一座とリーダーである人形遣いの存在、観客との相互作用、ジャワ島西部の社会における人形芝居の位置づけなどについての報告があった。

慶応義塾大学の山下一夫氏からは、「中華圏の人形芝居」と題して影絵人形芝居(各地に分布)、棒操り人形芝居(各地に分布)、鉄枝(テッ)人形芝居(広東省潮州発祥でマレーシアなどにも伝わる)、手遣い人形芝居(中華圏南部、台湾に分布)、糸操り人形芝居(各地に分布)などの歴史、特徴、物語などについて写真と映像などを通して網羅的な概要提示がなされた。成立の歴史的経緯については人間の演じる俳優劇の系統との関連にも触れつつ相互に関連しながら発展してきた経緯が示され、人形ならではの特性や上演コンテキストなどを活かした上演の独自性が提示されると共に、台湾の布袋戲(ホーダヒ)のテレビ進出や日台合作作品など現代における試みについても紹介がなされた。

休憩をはさみ、滋賀県大津にある「人形劇の図書館」の瀧見英明氏より実際の人形を提示しながらデモンストレーション付きの発表が行われた。東北の首管式の手法などを中心に他地域との比較も取り混ぜつつ興味深い解説が行われた。実際の人形を見て具体的なイメージを持ちながらその操作方法などを知り各様式の特徴についての解説を聞ける貴重な機会となった。人形の特徴そのものにとどまらず、現在の日本における人形芝居を取り巻く現状についても多くの課題が指摘された。

ディスカッションにおいては、担い手について、観光化とメディアについて、他ジャンルとのコラボレーションについてなどの観点から、各発表者の見解が示された。

質疑応答では、影絵・人形芝居の起源や発展の歴史などについて、地域間の関わりなどについて、観光化と上演の本来の意味のせめぎ合いについて、人形芝居研究というマニアックな研究の意義について、担い手の育成について、など多くの参加者から多岐に亘る質問があり、活発な議論が行なわれた。

長時間のシンポジウムとなったが、終了後も実際の人形を手にしつつ、語り合う参加者の姿が多く見られたことが印象的であった。

*なお3月15日には「東北の手遣い人形 庄内羽人形芝居」公演も行われ、東北から東日本一帯でさかんに上演されていた「手妻人形」と呼ばれる人形芝居の伝統芸が多くの観客に披露された。

文責 福岡まどか

2 開催予定の定例研究会案内

(1) 第 302 回 定例研究会 (日本音楽学会西日本支部第 63 回支部例会と合同)

日時：2025 年 6 月 29 日 (日) 12:00～16:25 (休憩：14:00～14:15)

会場：京都市立芸術大学 A 棟 1 階 伝音セミナールーム (対面のみで開催です)

〒600-8601 京都市下京区下之町 57-1 A 棟 1 階 <https://www.kcua.ac.jp/access/>

司会：福岡正太・齋藤桂

プログラム

① 卒業論文発表：12：00～12：35

田村唯花 (関西学院大学 文学研究科)

「坂道・曲がり角のだんじり囃子」の存在意義と消滅の背景——三田天満神社秋季例大祭を例に」

兵庫県三田市の秋祭りでは、囃子を伴うだんじりの巡行が行われる。発表者は卒業論文において、この囃子を調査し、なかでも坂道と曲がり角での囃子は、他に比べてテンポが遅い、音数が少ない、次のフレーズまでの間が長いという、3 つの特徴を持つことを指摘した。この囃子には、だんじりの曳き手に注意を促し、彼らの動きを合わせる合図としての役割があるが、練習時間の減少や、道路整備による地形の変化により、近年は伝承が途絶えつつある。

本発表では、上記のような卒業論文の調査結果に、古地図等を用いた地形の分析を加味する。さらに、三田市近郊の西宮名塩で催されるだんじり祭の「坂道の囃子」との比較をとおして、坂道・曲がり角の囃子の伝承が途絶えつつある要因を明らかにする。

② 卒業論文発表：12：40～13：15

松本愛布 (京都市立芸術大学)

「日本人向け K-POP ツアーから考えるミュージックツーリズム—パフォーマティビティと聖地化」

2025 年に京都市立芸術大学に提出した卒業論文の目的は、日本人を対象とする K-POP の聖地巡礼ツアーを事例として「聖地化」のプロセスを探求することであった。聖地巡礼ツアーとは、撮影地や事務所など、アーティストと関連する場所を訪れる観光行動のことを指す。現在では、K-POP アーティストの聖地とされる場所を巡るツアーが多く企画され、その数は年々、増加し続けている、しかし、既存の K-POP 研究ではグローバル化やビジネスシステムなどに焦点を当てたものが多く、K-POP とミュージックツーリズムに関する研究は少ない。また、ミュージックツーリズム研究においては、K-POP を対象とした研究はほぼない。このような背景を踏まえ、本研究では、実際に 2 つの K-POP 聖地巡礼ツアーで参与観察を行い、ガイドの言動の観察や、ツアー企画会社への書面でのインタビューを行った。

また、その結果を「パフォーマティビティ」や「通過儀礼」と言った理論的概念を用いて分析し、聖地化の過程にはガイドや観光客を含む、聖地に関わる人々の「語り」や「行為」、そして儀礼を通して段階的に作られる聖地化の構造を明らかにした。最後に、真正性という視点からこれらの要素を見直すことで、聖地化が行われる過程について論じている。発表では、以上のような卒業論文の概要について説明した上で、最後に、今後の展開として修士課程における研究についても触れることにする。

③ 修士論文発表：13：20～14：00

山本量子（京都芸術大学大学院）

「明治期の手風琴曲集に採譜された詩吟旋律が目指したもの——音楽政策との関係から」

本研究は、記録が乏しい明治期の詩吟旋律に関し、同時代に出版された手風琴曲集や『西洋楽譜日本詩吟集』等の洋楽譜及び周辺史料を体系的に調査することで、従来未解明であった明治詩吟の旋律例とその社会的背景を実証的に明らかにした。更に、五線譜や長音階導入・俗曲改良等の西洋音楽受容期の音楽政策が詩吟旋律に及ぼした影響を解明するとともに、当時の日本語の音韻論的議論と詩吟旋律との強い関連も示し、詩吟史・日本音楽史・日本語音韻史の発展に資する知見を提供した。

現代に至るまでの詩吟旋律の変化は標準アクセント受容の歴史と密接な関係がある。「脱平均」が国家戦略として掲げられる現代では、標準アクセントの受容を巡る意識も多様化し、賛否が交錯する新たな段階に移行している。従って、本研究は朗詠・詩吟における標準アクセント受容史研究の一端を担うものとなり、今後の音楽学と音韻学を柱とする学際的研究の基礎となることが期待される。(400文字)

④ 博士論文発表：14：15～14：55

志川真子（総合研究大学院大学）

「桂六斎念佛の復活に関する民族音楽学的研究」

2005年夏以降中断していた桂六斎念佛（以下、桂六斎）は、2019年、14年ぶりに再開された。発表者は修士課程の時から自らも桂六斎念佛保存会の会員となり、笛の演者として桂六斎の実践に参加し、復活過程の参与観察を続けてきた。発表者の博士論文「桂六斎念佛の復活に関する民族音楽学的研究」は、5年間の参与観察をもとに桂六斎の復活と伝承の実態を民族音楽学的な視点から検討したものである。本論文では、参与観察の中で実践的に引き出した4つの要素、すなわち「伝承」「担い手」「地域社会」「資金」を主要な議論の視点として設定し、桂六斎の復活と伝承について記述・分析を行った。本発表では、博士論文の内容に基づき、4つの視点それぞれから明らかになったこと、民族音楽学的手法の成果、桂六斎の復活のために必要であった条件などについて発表する。

⑤ 博士論文発表：15：00～15：40

木村優希（京都市立芸術大学）

「バルトークの《ピアノ・ソナタ》第3楽章における民俗音楽的特徴の様式化——時間的特性に着目して」

本発表の目的は、バルトーク・ベーラの《ピアノ・ソナタ》第3楽章を対象とし、民俗音楽に由来する特徴がどのように様式化されているかを解明することにある。バルトーク自身が民俗音楽の何を使うかではなく「いかにして使うか」を重視していたことを踏まえ(バルトーク 2018)、先行研究(Somfai 1981)で指摘されてきた本楽曲における民俗音楽的特徴と、民俗音楽におけるそれらの特徴との差異を、彼の言説と民俗音楽コレクションに基づき抽出した。その結果、民俗音楽に由来する「断片化」と「交替するリズム」について、本楽曲では過剰な形へと様式化されていることが分かった。これにより本楽曲の終盤に向かって「切迫感」が生み出され、ハンガリーの民俗音楽に散見される時間的特性が取り込まれたことが明らかになった。

⑥ 一般発表：15：45～16：25

陳 諾（京都大学大学院人間・環境学研究科）

「人民中国初期における大衆唱歌による情念喚起とその政治的利用——《得獎歌曲集》の言語情報と音楽テキストを中心に」

1954年、中国大陸の文化庁と文学芸術界連合会が共催した全国大衆歌曲コンテストの受賞作品を表彰するため、同年6月に《得獎歌曲集》と題された刊行物が編集・出版された。人民中国文化事業の最高機関による初の音楽的成果であるこの歌集が中国社会に果たした役割を論じるにあたり、その序文において国民の「思想」「感情」「情緒」「精神状態」といった情動関連の用語が多用されている点が重要な示唆を与えた。本研究では、音楽修辞理論と20世紀中葉以降の音楽と情念に関する先行研究を活用しつつ、《得獎歌曲集》による言語情報（歌詞、楽想表示等）と声部書法に焦点を当て、歌集全体が喚起し得た集団的情念とその影響力の範囲を明らかにする。

(2) 第303回 定例研究会

日時：2025年7月21日(月・祝) 13:00より

会場：京都市立芸術大学 伝音セミナールーム およびzoomによるハイブリッド開催
〒600-8601 京都市下京区下之町 57-1 A棟1階 <https://www.kcua.ac.jp/access/>

要事前申し込み（7月18日金曜日までにお申し込みください）

申し込みはこちら <https://forms.gle/Pg8TpNTBEEfWkvz5A>

歴史的音源所蔵機関ネットワークと共催による研究成果報告会

「大正・昭和の音とデザイナーレコードにおける宣伝と販売とは!?—」

司会 大久保真利子（九州大学総合研究博物館）
京谷啓徳（学習院大学）
大西秀紀（京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター）
毛利真人（京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター）
八日市屋典之（金沢蓄音器館）

※問い合わせ先：歴史的音源所蔵機関ネットワーク（レキレコ）事務局 rekireco@gmail.com

3 お知らせ

◇研究発表の募集

定例研究会で研究発表を希望される方は、発表種別（研究発表、修士論文・博士論文発表、報告等）、発表題目、要旨（800-1000字程度）、氏名、所属支部、所属機関、連絡先（E-mail等）を明記の上で、下記の西日本支部事務局まで、電子メールでお申し込みください。

修論・博論の発表は、修了認定大学の所属する支部が受けつけます。修了認定大学に勤務される会員は、修論・博論発表の候補に関する情報を当該支部へお寄せくださいますようお願いいたします。

◇メールアドレスを変更されたとき

東京の本部事務局(LEN03210@nifty.ne.jp)まで、必ずお知らせください。今後、学会全体として web を利用した会員専用サービスを充実させていくにあたり、電子メールの登録が必要となります。ご協力をお願いいたします。

(本号編集担当： 福岡正太・福岡まどか)

編集・発行：(一社) 東洋音楽学会西日本支部

〒565-8511 吹田市千里万博公園 10-1 国立民族学博物館福岡研究室気付

東洋音楽学会西日本支部事務局

E-mail : fkennme@gmail.com

<http://tog.a.la9.jp/nishi/index.html>